

開催地名	埼玉県鶴ヶ島市
開催日時	令和5年11月22日（水） 13：40 ～ 16：15
開催場所	鶴ヶ島市立南中学校
語り部	糸日谷 美奈子 （千葉県千葉市）
参加者	自治会員、自主防災組織役員等 250 名
開催経緯	本市は、過去に大きな災害を経験していないことから、住民の災害に対する防災意識向上が課題となっている。これまで市として学校を対象とした防災研修実績が無い状況であり、本市の防災力をさらに強固にするためには、学校全体の防災意識を向上させることが必要である。
内容	【助けられる人から 助ける人へ】 （１）釜石東中学校が経験した地震と津波 東日本大震災が起こった当時、釜石市にある釜石東中学校で教師をしていた。震災当日3月11日14:46、ほとんどのクラスは帰りの会を終えて部活動の準備をしていた。職員室では教員の携帯電話から地震速報が一斉に鳴り始め、すぐに震度6弱の地震が発生した。グラウンドの地面はまるで蒟蒻のようにうねり、一人では立っていることはできない状態であった。ある程度揺れが収まると、グラウンドにいたサッカー部の生徒たちはフェンスを飛び越え、逃げようとしていた。先生からは「そのまま行け」と指示が出る。体育館、校舎からも次々と生徒が出てくる。 体育館では照明が落ちてきた為バスケットボール部の生徒もそれを避けて避難していた。グラウンドも地割れで水が噴き出していた。地震後、校内が停電となり、校内放送が使えない状態になったため、訓練とは異なり点呼も取れないまま皆バラバラに避難した。800メートル離れた第一避難場所へ行く途中、過呼吸の生徒を連れていたのだが、走って逃げることも出来ない。周りを見渡すと誰もおらず、逃げ遅れたと感じた。ちょうど通りかかった生徒の親御さんの車で避難場所へ連れて行ってもらった。 やっとの思いで第一避難場所に行くと、一部の生徒から「先生、怖いです。もっと高いところに逃げたいです。」と声が上がったため、教員にて直ちに判断を行い、第二避難場所(第一避難所よりも高台)に移動することに決定した。同避難所に避難していた小学生と、中学生でペアになり手をつなぎ避難を始めた。この時点で、地震発生から30分が経過していた。第二避難所に着くとみんな助かったと感じた。しかしその時、町を見るとゴーッと音がして、何かがおかしいと感じた。建物の上から黒い煙が上がっており、自分たちのいる第二避難場所に迫ってくる。余震で建物が崩れたかと思ったが、「逃げろ！死ぬぞ。」第二避難所よりも高台にいた教員の声で、その煙の正体が津波ということを知った。本能的に逃げた方向にフェンスがあったが、逃げたい方向へ動けないのがフェンスにぶつかっているせいと気付けなかったほどのパニックに陥っていた。後ろからは黒い波が迫ってくる。懸命に走る中「後ろを振り返るな！走れ！走れ！」と声が飛び交っていることを覚えている。山の上からは、自分たちの町が波に飲まれていくのを見る事しか出来なかった。

しばらく状況を観察し津波が来ないことを確認した後に点呼を取ったが、泣いている人、過呼吸を起こしている人がたくさんいた。「大丈夫だよ」とも言えない。ただ背中をさするしかなかった。学校にも家にも戻れないことが判り、冬で雪も降る中、屋外のこの場所では過ごせない為、近くを通る有料道路を通過して町に出ることにした。歩いての避難だったが、途中で立往生していたトラックが何度も往復をして運んでくれ、なんとか廃校になった学校の体育館に到着した。

(2) 避難所生活

避難所に着くと、外では焚火がされており多くの避難者が避難してきていた。体育館に、2,000 名が避難している状況である。横になるスペースはなく体育座りで一晩を過ごした。トイレは仮設トイレが1つしかなく、トイレットペーパーもすぐになくなり、男性は建物の裏で用を足すように指示が出た。食料も全く無かったが、避難者の中に魚を運搬しているトラック運転手がおり、積み荷の食材を譲ってくださった。調理器具はないため、道路脇の排水溝の網で魚を焼き、空腹の感覚も無くなっていたが避難者で一口ずつ食べ分けた。雪が降り、非常に寒かったため段ボールを洋服の下に入れると少し暖かく、皆背中をくっつけ合って寝ていた。小学生や保育園児もいたが、驚くほど体育館の中は静かだった。家族と一緒に避難出来た人は少なく、多くの生徒は家族の心配をしていた。2日目の朝。更に内陸の中学校に移動することになり、そこには自衛隊が到着していた。ただ、町全体が被災しているため、市役所の人はいなかったため自分たちで避難所の運営を始めた。また普段の避難訓練とは違う場所に避難したため、全ての保護者と連絡が取れるまで1週間もかかった。ラジオ局に協力をしてもらい、生徒の無事を保護者へ知らせると同時に、避難場所を放送した。また自分達で避難所運営をしていかなければならない為、中学生たちは仕事分担をして、避難所の名簿を作ったりした。

(3) 翌年度の学校生活

釜石東中学校は被災して校舎が使えなくなったため、隣の中学校を間借りして、授業を始めた。何もかもが流されてしまったため、地域の人に多くの支援をもらった。教室の数が少ないため、一クラス60人で授業をし行事もできず苦しい一年であった。

(4) 釜石の奇跡と防災教育の取組みについて

釜石市は888名の死者、154名の行方不明者が出た。一方で学校にいた生徒達は全員無事だった。※欠席で命を落としてしまった生徒がいる。この事実から、テレビなどでは「釜石の奇跡」と報道されるようになった。しかし釜石東中学校ではこの「奇跡」という言い方に対して違和感があった。なぜなら、釜石では30年以内に大きい地震が来る確率は75%と言われていた。そのため、小中合同の避難訓練や防災学習、地域の方との顔合わせを毎年行っており、津波の被害や避難場所もあらかじめ確認をしていた。さらに中学生には「助けるのは自分たちである」という意識があった。釜石東中学校は、奇跡で助かったわけではなく、事前の備え・知識があったからこそ助かったのだ。学校はハザードマップでは安全だったにもかかわらず、学校より高い場所に津波が来た形跡を知ること、津波が来たら学校に留まっていたのは危険だということを改めて学んだ。更に釜石では、防災学習の際3つの言葉(キーワード)を大切にしていた。

	・ 自分の命は自分で守る 津波てんでんこ 点でバラバラになり逃げなさい。自分の命は自分で守ろうという意味。冷たく聞こえるかもしれないがお互いが必ず自分の命を守るという信頼感があってこそその考えである。 ・ 助けられる人から、助ける人へ 率先避難、自分がまず逃げれば誰かがつられて逃げるという意味だ。避難をしている人を見ると、人は逃げなくてはと思う。その一人目になるためのキーワードだ。 ・ 学んだことを地域に伝える 防災意識は、地域全体で高めていく必要がある。一人が防災に詳しくても意味がない。情報を伝達することこそが、防災につながる。 この3つの言葉(キーワード)を守れたから助かったと感じている。一方で奇跡と呼ばれたことに対しては、釜石で1,000人以上の犠牲者が出たのに称賛されるべきことなのかと今でも違和感がある。防災意識の共有や伝達がもっと出来ていれば、更にたくさんの人が助かったのではないかと。多くの人に伝えてほしい。 (5) 災害のあとの心の変化 苦しかったのは震災の後である。災害時のあとのこころの変化については4段階に変化する。最初の茫然自失期は現実感覚がなくなる。次のハネムーン期には同じ体験をした人の連帯感も上がりハイテンションになる。そして次の幻滅期に気持ちの変化がある。自分と周りとの違いが見えて、心無い言葉をかけてしまったり、苦しい思いをした。最後に再建期が訪れる。やるべきことが見つかり、前向きに動けるようになる。ここに到達するには人それぞれである。誰かが前を向いていかなければならないが、自分だけ前向きになって良いものか悩ましく感じる。そうした苦しい時期が続き、どうしても前向きになれない時にはボランティアに参加してみたい。誰かの為に何かをして「ありがとう」と言われると気持ちが変わってくる。苦しい気持ちが救われる。 自分にできることはないと思わず、誰かの役に立つかもしれない、どうやったら役に立つのだろうと考えるだけでも防災につながる。災害の時には苦しくなるが、立ち直る強さを身につけてほしい。
開催地より	釜石東中学校の生徒が全員助かったのは、平時からの学習と訓練の賜物であることが理解できた。これまで被災された学校関係者の体験談を聞く機会がなく、実際に経験された語り部の講演は、説得力があり、実感が湧いた。参加した生徒や教職員からは、地域の防災活動や被災者へ寄り添う事業に積極的に参加したいとの意見が多くあり、助けられる人から助ける人になれるよう、本日の講演を実践につなげていきたい。